

2017年2月1日発行

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター35号

<http://www.jsics.org/>

日本国際文化学会事務局

753-8502

山口県山口市桜島3-2-1

山口県立大学

国際文化学部事務室内

Tel/Fax:083-928-3423

email:jsics@yamaguchi-pu.ac.jp

国際文化学の「文体」 — ご挨拶にかえて —

日本国際文化学会会長 小林 文生



2014年度に本学会が新たに制定した「文化交流創成コーディネーター (ICCO) 資格認定制度」が始動して2年になります。この間、教育プログラム参加認定委員会 (馬場 孝委員長)、資格審査委員会 (岡 眞理子委員長)、そして運営事務局 (松居 竜五事務局長) のまことに献身的なご尽力によって、2年目は参加大学数も資格認定申請者数も増えて、その内容はさらに充実してきました。今あらためてこの制度の発足趣意書と規程を熟読すると、本学会が抱く共通の問題意識のもとに叡智を結集して、何年もの時間をかけて練り上げてきた宝物だとわかり、諸先輩及び会員の皆さんへ賛嘆の気持ちがふつふつと湧いてきます。昨年2月のニューズレター32号では初年度の様子をお知らせしましたが、引き続きその動きをつぶさに見るにつけ、大学の枠を超えた国際文化学という研究教育の観点をバックボーンとして踏まえつつ、課程修了証でもなく、また社会的実用性を第一目標にするのでもない、きわめて人生哲学的な価値を持つユニークかつ先進的な資格制度であるとの感を深めています。この資格をめざす学生 (若者) たちは、具体的な活動の結果としての大切な「資格」を得ると同時に、それと同じくらい大切な目に見えないもの、つまり「資質」と呼ぶにふさわしいものを確実に身につけていくものと思います。それは、今の閉塞感に満ちた日本社会に対して、強くアピールしていく価値のあることだと確信しています。

この1年間の学会活動を通じて、強く印象に残っていることがあります。それは、「いかに語るか」という視点です。昨年7月開催の第15回大会で、初めての試みとして「若手先端研究」という発表枠が設定され、その一つのセッションにおいて「国際文化学を問い直す」と題して発表と討論がなされました。そこでは、国際文化学の方法論の再検討に向けて、発表者各自が自分をどのような研究者として位置づけるかという根本的な問いから発出する知的格闘の過程が示されて、研究対象への愛に満ちた、のびのびとした発表が印象的でした。私が触発されて抱いたのは、過去・現在・未来を内包する課題と取り組む研究者として語る場合の自己自身が、その「語り手」としての「現在」をどのように把握するのかという問いでした。研究者が対象を把握する仕方を特殊な顕微鏡に喩えてみるなら、光を当てたことによって対象が変化するために、不断の相互作用においてしか「私」は対象に接することができない。その際、対象を語ろうとしている「私」=「語り手」の現在はどこにあって、どのような状態として認識され、それがどのように語りに反映されるのか、という疑問です。

じつは、昨年9月に開催された第2回ICCO短期集中セミナーでも、参加者の皆さんが様々なテーマ設定で行った成果発表を聞いていて、それが「京都、好き。Kyôto, je t'aime.」の種々のヴァリエーションのように感じられ、上に述べたのと似たようなことを考えました。つまり、フィールドワークでアンケート調査等をする過程で、他の誰でもない「私」が対象に接したことによってこそ生じるものがある

はずであり、結果をまとめるときに、それをどのように自覚して語る事が可能か、それ次第で異なる付加価値が生じるのではないかと、といったことです。

以上のような「いかに語るか」という視点を、ここでは「文体」と呼んでみましょう。「真理が始まるのは、作家が異なる二つの対象を美しい文体の必然的な環のなかに閉じ込めたときにほかならない」と言ったマルセル・ブルーストのように、これを個人のレベルで捉えることもできるし、他方、アントワヌ・コンパニョンのように、この「文体」という語の持つ社会的・文化人類学的な意味〔style=様式〕において「文体とは一個の文化である」と捉えることも可能です。国際文化学の「文体」、それは「好き」を表明する、世界に対する肯定の言葉から成る、豊かな可能性を秘めていると思うのです。

至らぬ会長でしたが、副会長の岡さんと馬場さん、事務局長の岩野さんを初めとして、着実に事を進めてくださった皆様と、ご支援くださった会員の皆様に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

ICCO資格認定制度教育プログラム 参加認定委員会活動報告

委員長 馬場 孝(静岡文化芸術大学)

「参加認定委員会」では、2015年2月の第1回委員会において8大学(学部・学科等)1大学院、翌2016年2月の第2回委員会で3大学1大学院の認定を行った。現在、11大学より計13機関の参加を得ている。

認定作業の苦勞、苦心は以下の点にあった。各大学申請のカリキュラム・フレーム(「基礎科目」「専門科目」「間文化活動/フィールド・ワーク科目」)は、「趣意書」でそれぞれの目的・内容が明記されている。他方、同じく「趣意書」で、認定に際しては各大学の教育理念や設置目的を尊重する大きな方針も謳われている。審査作業は、結局、この「科目内容」と「カリキュラムポリシー尊重」という2つの原則のすりあわせにもなった。後者を尊重しすぎると認定科目は「何でもあり」になってしまう。といて、前者を杓子定規に適用すれば、学会が重視する各大学の自主性・多様性を損なう。「カリキュラム・フレーム」とはそもそも「国際文化系学部・学科等が共有できる緩やかな科目群の枠組み」と定義されているが、その「緩やかな科目群の枠組み」をどの程度「緩やか」にするかのさじ加減を常に問われる作業となった。半年間の準備期間と2年間の認定作業で積み重ねた基準の具体化は「参加認定のためのQ&A」にまとめ、学会HPにアップしてある。

資格の創設に個人的に全く関わっていなかったこともあり、当初は、この資格制度そのものに半信半疑、いや「疑」の方が大きかった。「文化と文化との関係を調整する実践能力の養成」を謳いながら外国語能力が要件に全くないではないか。「学生の就職活動に活用できるように」という配慮もみられるが「名ばかり資格」になってしまわないだろうか。1週間のフィールド・ワークでは「箱庭」的な「擬似環境」での作業になりかねないのではないかと……。これらの「疑」である。

しかし、2015年、16年、京都での二度の「短期集中セミナー」を視察し、勤務先の大学から参加した学生たちの話を直に聞き、内容の充実と教育効果の絶大さを実感した。短期間の濃密で非日常的な時間空間での高揚と、日常に戻っての「大学生活」とのギャップは不可避かもしれない。だが、それもありうる現実の一つとして織り込んでの制度設計でもある。セミナーから戻っての「修了報告書」と、所定の登録科目の履修後の「申請書」の提出義務は、ありがちなそのようなギャップに向き合うよすがとなるだろう。今は「信」の方がはるかに大きい。参加を検討している大学には、個人的にも、安心して自信を持って参加を強く勧めている。

参加認定に関しては、資格制度は次のような「路線の選択」に直面している。小さな「岐路」かもしれない。一般論を言えば、参加大学数は多ければ多いほど、資格としての基盤は強化され、認知度も高まり、

信用も深まる。「国際文化学類縁の学部・学科」のネットワークは広がれば広がるほど、良い。他方、資格制度の柱石である「短期集中セミナー」は30人が最大受け入れ可能人数であろう。参加大学数は現在11。すなわち1大学3名弱が現時点での年平均資格取得可能学生数である。かなり少ない。そして、参加大学数が増加すればするほどその数は小さくなる。今後もこの「国際文化学類縁の輪」を広げていくべきか、あるいは、学会活動に理解の深い現在の「小さな輪と和」を大切に、規模の拡大よりも活動の深化に意を用いるべきか。参加認定に関わる今後の課題であろう。

2017年度第16回全国大会(宮崎公立大学) 大会テーマ「<2020年>の越え方—時代を跨ぐ・地域を繋ぐ・文化を紡ぐ」 自由論題を募集しています。ご応募お待ちしております。

- ・自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。
- ・応募にあたっては学会ホームページの「全国大会発表要項」をご一読ください。
- ・いずれも発表時間は質疑応答も含めて30分とします。質疑応答の時間が十分とれるよう、発表時間の目安を20分程度としてください。
- ・応募は日本国際文化学会の会員に限ります。ただし、現在学会会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得るものとします。
- ・応募は、氏名・現職(大学教職員・有識者・企業や団体・研究所等の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記)・連絡先・自由論題発表題目・キーワード(3~5語)を冒頭に記し、発表要旨(40字×25行以内)をつけて、2017年3月末日(必着)までにご提出ください。なお、「全国大会発表要項」では3月20日締め切りとなっていますが、周知の期間を設けるため、今回は従来通り3月末日となっています。
- ・提出先：大会事務局(E-mail) 2017jsics@miyazaki-mu.ac.jp
- ・応募いただいた場合、1週間以内を目処に受取確認メールをお送りします。受取確認メールが届かない場合は、お手数ですがご一報お願いいたします。
- ・応募いただいた自由論題については、2017年4月初旬に開催する常任理事会で審議し、結果についてご連絡いたします。
- ・大会の詳細は4月中旬に発表します。多数のご参加をお待ちしております。

第16回全国大会プログラム日程・共通論題等が決定いたしました。 詳細は次回ニュースレター、大会チラシ等でお知らせいたします。 多数のご参加をお待ちしております。

- ・日 時：2017年7月8日(土)・9日(日)
- ・場 所：宮崎公立大学
〒880-8520 宮崎県宮崎市船塚1-1-2
- ・大会テーマ：「<2020年>の越え方—時代を跨ぐ・地域を繋ぐ・文化を紡ぐ」
- ・日 程：2017年7月8日(土)：常任理事会・理事会(昼食時)
2017年7月8日(土)：シンポジウム、共通論題、自由論題、情報交換会等
2017年7月9日(日)：フォーラム、総会、共通論題、自由論題等

●大会日程 *自由論題の採択数等によりスケジュールが若干変更されることがあります。

| 7/8日(土) | | 7/9日(日) | |
|-------------|--------------|-------------|---|
| 9:00~ | 受付 | 8:00~ | 受付 |
| 10:00-12:00 | 自由論題 I | 9:00-11:00 | 自由論題 II |
| 12:05-13:20 | 昼食、常任理事会・理事会 | 11:10-12:50 | 昼食、総会、第7回平野健一郎賞表彰式、文化交流創成コーディネーター資格認定優秀者の発表 |
| 13:30-15:00 | 共通論題 I | | |
| 15:15-17:30 | シンポジウム | | |
| 18:30-20:00 | 情報交換会 | 13:00-14:30 | フォーラム |
| | | 14:45-16:15 | 共通論題 II |

●大会事務局

大会実行委員長：倉 真一（宮崎公立大学人文学部）
連絡先：〒880-8520 宮崎県宮崎市船塚1-1-2
宮崎公立大学人文学部 倉 真一研究室気付
e-mail：2017jsics@miyazaki-mu.ac.jp

●大会参加費

一般会員 2,000円（当日2,500円） 一般非会員 3,000円（当日3,500円）

院生・学生 1,000円（当日1,500円）

情報交換会： 一般 5,000円 院生・学生 2,500円

お弁当（お茶つき）：【7月8日】1,000円 【7月9日】1,000円

*当日は学生食堂は営業していません。また大学周辺には飲食店が少ないため、お弁当のご予約をお勧めします。ご予約は4月以降の大会参加登録時をお願いいたします。

●大会参加申し込みと振り込み先

大会参加申し込みフォーム、大会参加費振込用の振込用紙は、4月以降発行の次回ニューズレターに同封し、宛先・振込先もご案内いたします。ご案内は学会メーリングリストでもお知らせいたします。

大会実行委員会では参加の申込みを、前回大会に引き続き原則メールで承ります。会員の皆様には、お申し込みフォームを、学会メーリングリストを通じてお送りしますので、その内容をご確認のうえ、大会ご参加予定の詳細と委任状につきまして、メール本文の所定欄に書き込んでいただく形で、所定の期日（次回ニューズレターでお知らせします）までに、大会実行委員会（2017jsics@miyazaki-mu.ac.jp）宛てにご送信ください。郵送による申し込み希望の方や非会員の方の申し込み方法も含めた詳細につきましては、4月以降にあらためてお知らせいたします。

●託児所利用について

大会期間中に限り、事前に大会実行委員会を通じて予約をされた参加者に、大会会場内（宮崎公立大学）に設ける臨時託児所のご利用が可能となります（料金は利用者負担となります）。予約等についての詳細は4月以降に学会ホームページにアップロードいたします。

●情報交換会の会場および会場への移動について

7月8日(土)の情報交換会の会場は、宮崎市中心部の「ホテル メリージュ」となります。宮崎公立大学から会場までの送迎（無料）をご利用いただけます。

●宿泊先

宿泊については、各自でご予約をお願いします。情報交換会の会場となります「ホテル メリージュ」は、宮崎市のメインストリートである橋通り沿いにあり、情報交換会の終了後ご宿泊先へ向かう際の利便性を考えると、宮崎市中心部の橋通り周辺、JR宮崎駅周辺、大淀川沿い周辺および県立宮崎病院周辺のホテルをお勧めいたします。これらのエリアのホテルは、大会会場の宮崎公立大学へもバス・タクシーで5～10分以内の範囲となります。

*スポーツイベント（トライアスロン大会）と日程が重なるため、一部のホテルでは満室も予想されます。早めのご予約をお勧めします。

| | |
|----------|--|
| 橋通り周辺 | ホテルルートイン宮崎、ホテルJALシティ宮崎、東横INN 宮崎 中央通、エアラインホテル、アリストンホテル宮崎、ホテルメリージュ、エムズホテルクレール宮崎 ほか |
| JR宮崎駅周辺 | JR九州ホテル宮崎、ホテルスカイタワー、リッチモンドホテル宮崎駅前 ほか |
| 大淀川沿い周辺 | 宮崎観光ホテル ほか |
| 県立宮崎病院周辺 | ホテルマリックス ほか |
| 宮崎公立大学周辺 | 宮崎第一ホテル ほか |

●7月9日(日)の宮崎空港ゆき直行バスの運行について

大会2日目の全日程終了後、大会会場から宮崎空港までの直行バスを運行いたします。午後5時までに宮崎公立大学を出発し、午後6時以降に出発する東京（羽田）、大阪（伊丹）、中部、福岡行きの各便への搭乗が可能です。宮崎空港ゆき直行バスの運行に関する詳細は、次回ニューズレターおよび大会チラシ等でご案内いたします。

●共通論題が決定しました

多数のご応募、ありがとうございました。

7/8(土)＜共通論題Ⅰ枠 13:30-15:00＞

- ・共通論題1 「結婚をめぐる生きづらさ」を『生きづらさ学』的に分析してみる
—生きづらさ学における「評価モデル」確立の試み—
(代表者：相原 征代)
- ・共通論題2 日米知的交流における戦前・戦後の断続
(代表者：高光 佳絵)
- ・共通論題3 故郷を求めて・故郷を世界へ—近代台湾と日本・日本人—
(代表者：井竿 富雄)

7/9(日)＜共通論題Ⅱ枠 14:45-16:15＞

- ・共通論題4 「国」を意識するとき—文化的越境性から考える伝統、民族、経済—
(代表者：高橋 梓)
- ・共通論題5 地域社会からみた「2020年」の越え方—ジェンダー・地方分権・オリンピック—
(代表者：梅津 顕一郎)
- ・共通論題6 国際文化学の視点から考えるグローバル人材育成の新たな方法論
(代表者：斉藤 理)

第7回平野健一郎賞を募集します

「第7回平野健一郎賞」の募集を開始しますので、多数のご応募をお待ちしております。応募規定は学会ホームページをご覧ください。<http://www.jsics.org/hirano.html>

なお、第15回総会を受け、第71回常任理事会（2017年1月開催）において、応募対象の研究論文等については従来の年度末から変更し、応募日（4月30日）までの発行を含むとしました。

4月1日より日本国際文化学会事務局が移動しますので、ご注意ください。

●**応募先**：日本国際文化学会事務局宛て
〒252-0805 神奈川県藤沢市円行802番地
多摩大学グローバルスタディーズ学部
Tel：0466-82-4141（総務課）
e-mail:jsics@gr.tama.ac.jp

●**応募締切**：2017年4月30日（必着）

●**応募書類**：応募書類は審査後に返却いたします。

●**応募結果の発表**：第16回全国大会総会において発表し、授与式を行います。

2016年度会費納入のお願い

年度末が近づいてまいりました。2016年度会費納入がまだの方はぜひお振込みをお願いいたします。

一般会員：10,000円、大学院生：5000円、学部生：2000円

郵送済みの振込用紙をお使いいただくか、あるいは、郵便局の振込用紙をご利用いただき、振込金額をお書きの上、下記振込先までお願いいたします。ご所属、連絡先、お支払の会費年度のご記入をお願いいたします。

振込先：01390-1-89396 日本国際文化学会
学会運営にご協力をお願いいたします。

*平成25年度総会により、年会費（10,000円）の支払いに困難を覚える者は、その状況説明を付けて常任理事会宛に会費の減額（5,000円）を申請できるとしました。希望者は、常任理事会宛てに理由書を提出ください（書式自由、学会事務局まで郵送）。

編集後記

ニューズレター35号をお届けします。年度末のなかでいささか発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。日本国際文化学会も、かなりの歴史を経てまいりました。このニューズレターももう35号です。次の全国大会は16回となります。時間の流れを感じます。この歴史を明日に続けていくためにも、皆様の積極的な御参加をお願いしたいと考えています。学会は皆様の参加によって日々創りあげられていくものと感じています。

今号をもちまして、日本国際文化学会の事務局が山口県立大学から多摩大学に移転します。私ども事務局（岩野、ウィルソン、堀、井竿）の仕事には数々の至らざる点があったものと思わしますが、皆様の御協力によりまして、無事ここまでたどりつくことができました。ここに会員皆様の御協力に対して、厚くお礼を申し上げたいと思います。

（日本国際文化学会事務局 井竿富雄）